

4. 男性更年期障害に対する漢方療法

大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学 (泌尿器科)
辻村 晃

加齢男性性腺機能低下症 (Lateonset hypogonadism; LOH 症候群) は、「加齢に伴う血中男性ホルモンの低下に基づく生化学的な症候群」であり、症状は身体症状、精神・心理症状および性機能症状の3つに大別される。一般に、更年期症状と言われるものもこの中に含まれる。ただ、男性ホルモンの低下を伴わない更年期症状も存在するため、概念は複雑である。LOH 症候群に対する治療は男性ホルモン補充療法が第一選択であるが、更年期症状を有するものの男性ホルモンが正常な患者に対する治療は未だ確立されていない。これらの患者に対して、漢方製剤を用いて症状の緩和を図る試みは以前から行われてきた。最近、151 例という比較的多数例の日本人患者に桂枝茯苓丸、八味地黄丸、当帰芍薬散、加味逍遙散などを投与し、総合判定で71%の有効性であったとする報告がなされた。

我々は男性ホルモンの低下を認めない男性更年期障害患者に対して柴胡加竜骨牡蛎湯を用いて治療を試みた。治療8週後のフリーテストステロンに変動は認められなかったが、質問票で評価した男性更年期障害症状は有意な改善を認めた。柴胡加竜骨牡蛎湯はもともと勃起障害に効果的とされていたが、最近、新たに前頭前野のグルココルチコイド受容体の減少の改善に基づいて、視床下部-下垂体-副腎皮質系の機能障害と前頭前野の機能低下を改善することから、抗うつ作用を有していることが報告された。性機能障害と抑うつ状態が主な症状である日本人の男性更年期障害に対する治療薬として、適したものの一つと言えよう。我々はさらに、柴胡加竜骨牡蛎湯の作用メカニズムについて、治療前後で内分泌学的検査とともに18種類の血中サイトカインを測定し、その推移を解析した。その結果、柴胡加竜骨牡蛎湯の服用により、男性ホルモンをはじめとする内分泌学的所見での変化は認められなかったものの、18種類のサイトカインのうち、IL8、IL13、IFN γ 、TNF α の有意な上昇が確認された。従って、男性ホルモン補充療法とは異なるメカニズムで、更年期障害症状を緩和している可能性が考えられる。

漢方製剤についてはRCTでの成績は報告がなく、未だ十分なエビデンスとは言い難いが、今後、漢方製剤が男性更年期障害に対する選択肢の一つになり得るものと思われる。